



伝説の世界的ブランドコンサルタント

秦 郷次郎

(経営者・ルイ・ヴィトン・ジャパン社長 31年生)

1937年、昭和12年高知市生まれ。旧姓松崎。慶應義塾大学経済学部卒。会計事務所勤務後、ルイ・ヴィトン・ジャパン社長。仏レジオン・ドヌール勲章叙勲。秦ブランドコンサルティング代表取締役。(写真・L・V提供)

ルイ・ヴィトンの飛躍的進展を演出

秦郷次郎は一九三七年、高知市のはりまや橋近くで生まれ育った。八歳の時に終戦を迎えるが、これを境にもたらされた社会体制の変化は、日常生活を一変させた。アメリカ流の「モノの豊かさ」に代表される欧米文化がふれはじめ、その波は高知にも押し寄せた。邦画より洋画の上映が盛んになり、音楽もクラシックやポピュラー音楽が席巻し始める。

秦も洋画を見ることに熱心になり、いつか字幕なしで理解できるようになりたいと英会話の勉強に熱を入れた。「将来は映画評論家、いや小林秀雄のような文芸評論家のほうがカッコいいなあ」などと十代の若者にありがちな勝手な夢を膨らませていた。しかし商家に生まれ、商人としての勘が鋭かった父親から「評論家ではよほど才能がないと食べていけない、経済でも勉強したほうが良い」と言われ、土佐中高校を卒業すると、慶應義塾大学経済学部に進学する。

一九六一(昭和三十六)年建築家の義兄、圓堂政嘉の勧めもあり、大学卒業と同時にアメリカに留学する。ゼミの川田寿教授からは「将来不利になるから、留学するにしてもとりあえず一度は就職しておいたほうが良い」との助言があったが、十代のころからアメリカで勉強したいという夢を持ち、英語の勉強に力を入れてきた秦の気持ちは変わらなかった。

英語漬けだったカリフォルニア大学バークレー校での一年の生活を経て、カナダとの国境に近いニューハンプシャー州にあるダートマス大学のエイモス・タック・ビジネススクールに入学する。

目が覚めたクイン教授の言葉

ここで受けたJ・B・クイン教授の講義は今も秦の発想の原点になっている。授業前日に渡された膨大な研究資料を読み、要点をメモしたうえで、とうとうとクラスで説明をしていると、それを黙って聞いていたクイン教授は秦に向かってこう言った。

「ミスター・ハタ、私は資料についての君の考えが聞きたいのだよ。文献などは皆、既に読んで知っていることで、君が説明する必要はない。私が知りたいことは、この資料についての君の分析と、君が提起したい問題点なのだよ」

秦の「勉強」の成果は無残な結果に終わるが、この体験を通して、考える、ということがどう

いうことを改めて知らされた。「自分の頭で考え、分析し、他人とは異なる発想を導き出し結論を得る。結論が出たら信念をもって実践する」

この教訓から学んだ問題解決の方法と思考のプロセスが、その後のコンサルティングの仕事を通じて鍛えられ、ルイ・ヴィトンの日本進出に際して戦略提案につながっていく。

一九六四(昭和三十九)年、米国最古(一九〇〇年創立)のTUCKビジネススクールを日本入初のMBA(経営学修士)取得者として卒業、ニューヨークに本部を置くピート・マウウィック・ミッチェル会計事務所に入社。ピート・マウウィックに決めたのは、大学時代から漠然とコンサルティングという仕事に憧れていた秦にとつて、実務経験がなくても将来のコンサルティング要員として雇ってくれる唯一の会社だったからだ。

入所後はニューヨークのスタテン島に住み、毎朝フェリーでウォール街のすぐ近くにあるピート・マウウィックのニューヨーク事務所に通った。約一年の会計監査の仕事を経たのち、念願の経営コンサルティング部門に配属になる。

一九六七(昭和四十二)年、秦は六年ぶりに帰国する。ピート・マウウィックが他の会計事務所に先駆けて東京にコンサルティング部門を開設することになったからだ。当時の日本は貿易自由化の流れが加速する中、日本進出を狙う外国企業から日本市場進出に関するコンサルティングの業務が急増するが、この時点ではまだルイ・ヴィトンとは遭遇していない。

一九七六年二月九日、ルイ・ヴィトンと出会う極寒のバリ

秦のその後の人生を大きく変えるルイ・ヴィトンとの出会いは一九七六(昭和五十一)年、極寒のバリでのことだ。二月九日、月曜日、バリの日本大使館の隣でニューヨーク時代の旧友フランク・ドローランとランチをとっていた。彼はコンサルタントとして仏ルイ・ヴィトン社のエグゼクティブ・サーチの仕事に従事していた。

フランク「最近急に大勢の日本人客がマルソー通りのルイ・ヴィトンの店に来るようになったんだ。明らかに業者と思われる客が多くてヴィトン・ファミリーは対応に困惑している。キョウウ(秦のニューヨークでのニックネーム)、一度、ファミリーの当主に会って、君がこれまでしてきた外国企業の日本市場参入プロジェクトの経験を話したらどうか。仕事になるかもしれないよ」

秦は即座に行動を開始した。翌日アンリ・ルイ・ヴィトンに会うことになった。秦は実はこの時までルイ・ヴィトンという名前も商品も知らなかったという。秦は初めて会った時のことは今も鮮明に覚えているそうだ。自著『私的ブランド論』ルイ・ヴィトンと出会う『の中で述べた。

「一九〇センチ近い長身のアンリ氏は、いかにもバリの老舗らしい風格をただよわせたマルソーの店の一角にある彼の部屋に私を迎えてくれました。十坪足らずの細長い部屋には店内が見えるように小さな窓が一つついていて、壁一面にアンティークトランクがはめ込まれていました。居ながらにしてルイ・ヴィトンの歴史が感じられた。初めてフランスの伝統の重さを実際に

肌で感じた瞬間でした」

秦は東京に戻り小さな洋品店をはじめさまざまな店のショウウィンドーをのぞいて回った。商品の価格ははてんでバラバラ。総じてバリの四、五倍の値段で売られていた。早速最初の調査を提案する。それは並行輸入を通して売られている商品の価格を主要都市について調べることから始まった。やがてルイ・ヴィトンとコンサルティング契約を結び、東京進出へ向けて本格的準備に入る。秦はこれまでのコンサルティングの経験から、日本の会社と組んで進める合弁事業はしよせん同床異夢でうまくいかないと確信に近いものを持っていた。

経営コンサルタントとして日本進出の準備を請け負い、ほぼ作業を終え、あとは東京支社長をだれにするかを残すのみになっていた。ファミリーの中で白羽の矢が立った某氏は、日本の百貨店の担当者からブライニングが出て振り出しに戻る。翌週にお披露目を控えて秦は窮した。この時秦が「僕が代行としてしばらくのぎましよう」と買って出て四半世紀に及ぶ。

一九七八(昭和五十三)年、秦はルイ・ヴィトンの日本とアジア・太平洋地域代表に就任し、一九八一年には日本法人ルイ・ヴィトン・ジャパン(LVJ)を設立する。以来驚異的な勢いでルイ・ヴィトンの売上高が増勢をたどる。一九七八年から二〇〇三年までの二十六年間で減収は一九九二年だけであった。パブルのころはもちろんだが、パブルがはじけて日本経済が長期停滞期に沈んでもルイ・ヴィトンの売上高は右肩上がりで伸び続けた(以後非公表となるが、秦がLVJ社長を退任する二〇〇六年までは伸び続けた)。

フアッション界に詳しい三浦彰はこの間のルイ・ヴィトンの奇跡についてこう語る。

「ルイ・ヴィトンはいち早く日本法人を設立し、百貨店でのインショップ戦略を推進し、銀座並木通りに路面直営店をオープンした。ルイ・ヴィトンは一九八七(昭和六十二)年には早くも年商百億円の大台に乗せた。ライセンス物では「カルダン」「サンローラン」「ディオール」などが、四百億から五百億円規模のビジネスを展開していた。インポート物での百億円は難しいだろうといわれていたが、ルイ・ヴィトンはこれをあっさりクリアした。コピー防止のために第二代当主ジョルジュ・ヴィトン時代に考案されたモノグラムが、日本の家紋を連想させるから日本人は「ルイ・ヴィトン」に知らず知らずのうちに引かれるのだという説もあったほどだ」

年商千億円を突破

週刊東洋経済が「知られざるルイ・ヴィトン」を特集する二〇〇一(平成十三)年には、ルイ・ヴィトン・ジャパンの売り上げは千億円を突破し、さらに伸び続け、ルイ・ヴィトン全体の売り上げの六〇%を占めるに至る。高知市の生家に近い廿代町に高知店を開店するのは秦の愛郷心であり、地方都市進出のためのアンテナショップの狙いも込められていた。

『季刊高知』のインタビュウに答えて秦は高校時代を振り返る。

「私は高知の中で特別な人間でもなかったと思います。何しろ坂本龍馬にあこがれた青年でした。そして私の友達は文学青年が多くて、小説家志望とか、そんな仲間輪にいましたからね。



ルイ・ヴィトン直営店オープン。左からアンリ・ルイ・ヴィトン会長夫妻、アンドレ総支配人、秦(1981年)

英雄の坂本龍馬にあこがれると同時に著名な文筆家にあこがれる。だから矛盾だらけ(笑い)」

その頃秦は映画少年でもつばら西洋映画であった。「その当時は日本映画の良さがわからなくて、特に小津安二郎監督の作品なんか、自分たちの周りの生活と何も変わらないわけですよ。でも今はそれがとても感動するんですよ」

二〇〇一年フランス政府からレジオン・ドヌール勲章のシユヴァリエを受章。二〇〇六(平成十八)年LVJ社長を退任。ルイ・ヴィトン特別顧問に就任。現在はニューヨーク在住。秦ブランドコンサルティング代表取締役。

一時途絶えていた秦の近況が「桂浜たより」(四号、二〇一七年十二月号)に突然掲載された。「ハワイに数年住み、気が付くと娘と息子二人ともに大事な就学の節目の年齢になっており、熱慮の結果、初・中等の教育環境が最も整っているNYへの移住を決心しました。意識はしていませんでしたが、結局は東京、ホノルル、マンハッタンと孟母三遷となつてしまいました」

異郷の地で晩年を迎えた秦だが、国際ビジネスマンとしての旗を収め、土佐中高時代の洋画少年の日に帰ることも少なくない。(鍋島高明30年生・記)

好評販売中!

『筆山の麓』 土佐中高 100年人物伝

世界で活躍!! 自由な校風が育んだ多彩な人材!
【編集・発行】土佐中高100年人物伝 刊行委員会 【販売元】高知新聞総合印刷



表紙・田島征三(34回生)

大いに活躍する同窓生の実像から、
在学時のエピソードまで活写、楽しみながら学べる
同窓会長・岡内紀雄

これほどの多彩な人々を生み出した本校の
百年の歩みの豊かさを、改めて実感しています
学校長・小村 彰

登場人物

校風創った初代校長 三根圓次郎
三代校長 大嶋 光次
ブラジル移民 中沢源一郎
三菱電機 進藤 貞和
公文式創案 公文 公
前衛美術 高崎 元尚
文部事務次官 宮地 貫一
人権派裁判官 下村 幸雄
精神医学 大原健士郎
全力疾走 籠尾 良雄
日石三菱 泉谷 良彦
名優 北村総一郎
『パルタイ』 倉橋由美子
ルイ・ヴィトン 秦 郷次郎
東大17勝 岡村 甫
京大総長 尾池 和夫
美の女神 合田佐和子
絵本作家 田島征彦・征三

ガーナ大使 浅井 和子
呼吸器外科医 中川 健
実業家 青木 章泰
カシオミニ 羽方 将之
政界に迫る作家 塩田 潮
歴史漫画家 黒鉄ヒロシ
能と現代劇演出 笠井 賢一
百学連環の学魔 高山 宏
尺八吹く医師 岸本 寿男
厚労事務次官 村木 厚子
ソフトビジネス 武市 智行
直木賞作家 坂東眞砂子
宇宙物理の同級生 川村静児・須藤靖
人間描く作家 門田 隆将

政治家・国務大臣 谷川寛三／農水大臣 山本有二／防衛大臣 中谷元など150余名紹介。他に関連同窓生・恩師など人名索引に登場総数約250名。

内容構成

- 第一章 校長編
- 第二章 卒業生編Ⅰ(1～27回生)
— 建学のいぶきを受けて —
- 第三章 卒業生編Ⅱ(28～39回生)
— 焼土に理想を掲げて —
- 第四章 卒業生編Ⅲ(40～55回生)
— 新しい世界へ挑む —
- 特集・政治家群像 ほか

高知県内主要書店、高知新聞販売所ほかで販売中。

☆郵送ご希望の方は、FAXまたはオンラインショップから高知新聞総合印刷までお申し込みください。

FAX申込書 | 088-885-0093 |

□書名 『筆山の麓』 土佐中高100年人物伝 ■A5判 ■320ページ	□申込数 冊	■定価1,200円(税込) + 要別途送料 ■ http://www.kochi-insatu.co.jp   → → → → →  → 高知新聞総合印刷 検索 オンラインショップのページへ
□お名前	□お電話	
□ご住所		

【お問い合わせ】高知新聞総合印刷 出版担当 〒781-8121 高知市葛島1-10-70 (担当:山本) TEL 088-885-0092
 ※本著の書店での販売及び高知新聞総合印刷での取り扱い、2021年10月31日までとなっております。購入ご希望の方は、お早めにお申し込みください。